〔研究ノート〕

證眞の日本オーソドクシー批判

――虚心に文献を読んだ研究者の見事な成果――

小　林　信　彦*

インドでは体の機能と心の機能が切り離されていない。人間あるいは人間以外の動物の「行い」（karman）は，三つの局面でとらえられる。体を用いる局面と声を用いる局面と心を用いる局面である。この文化伝統を受け継いで，仏教でも“体を動かす行動は声を出す意志表明を前提とし，声を出す意志表明は心でなされる判断を前提とする”と言われる。[1] 体を動かすことは心で判断することを抜きにして考えられていないのである。

自ら動く動物には必ず心が宿り，自ら動かない植物には心が宿らない。仏教の体系で，心を備えた動物は心を欠く植物と相互排除的に対立する。仏教の関心はもっぱら人間と人間の心の移転先である動物にしかなく，植物を含む自然は関心の外にある。仏教文献で植物が描写されることはない。まして，植物がブッダになる可能性など，話題として取り上げられることさえない。

動くことのできる動物が何かの行動をする度にエネルギー（śakti）が発生して，心の最も深い部分に蓄積される。身体が死んでも心は死ぬことがなく，次々と別の身体に移動して機能し続けるが，蓄積されていたエネルギーはその間に現象化する。

＊本学文学部

キーワード：草木成佛，山川草木悉皆成佛，中陰經，證眞，一闡提

古代の日本には中国で翻訳された仏教文献がほとんどすべて輸入されていた。最澄や空海を初め多くの人が勤勉に仏教文献を読もうとしたけれども，仏教に通じた指導者を欠いたまま，勝手な読み方をした。この人々は細かいことをよく知っていることがあっても，肝心の所に理解が及ばず，仏教という異文化を体系としてとらえることはできなかったのである。

そして，その衝撃的な例の一つが「草木成佛」である。何と“草や木がブツ（佛）になる”と言うのである。日本人がこの新構想を打ち立てた時，仏教という異文化を退けているという意識は全くなかった。それどころか，自分たちが正しく仏教を理解し正しい方向に仏教を展開させていると堅く信じていたのである。

そうすると，「草木成佛」は仏教文献に典拠がなければならないことになる。9世紀の巨匠として名高い安然は，『中陰經』という文献を見つけ出して，「草木成佛」の正当性を論証しようとした。ところが，この文献は仏教の伝承を受けたものではなく，中国人が勝手に作り上げた偽の経典（僞經）である。しかも，「草木成佛」については何の言及もない。

大学者の安然は『中陰經』から抜き出した一行を勝手気ままに意味付けして「草木成佛」について堂々たる論陣を張ったのである。[2)]こうして最澄に始まる日本オーソドクシーの立場が補強された。それ以後の日本人もそろって安然に従い，“草木國土悉皆成佛”という非仏教的な言葉が作られて，仏教の神髄を伝えるものとして人口に膾炙するようになった。

日本全体が仏教の体系に無関心な中で，證眞（1130?-1207＋α）は極めて特異な存在である。證眞も「『中陰經』の文」を挙げているが，[3)] ほかの人たちのように日本オーソドクシーを擁護するためではなかった。対論者の言葉を紹介する際に「『中陰經』の文」を挙げているにすぎず，自説を補強するために引用しているのではなかった。

證眞は平忠盛の孫，設定の子と伝えられ，出家して比叡山に登った。そ

の勉強ぶりは恐るべきもので，比叡山に伝えられる伝説によると，源氏と平家が戦争をしているのも知らず，戸を閉ざして世間との交渉を断ち，漢訳仏典のすべてを16回読んだという。1160年前後に主著『三大部私記』の執筆に着手し，1190年頃から修正を加えて1207年に完成した。

「もし『中陰經』の言う通りなら，すべてのものがすでにブッダになっていて，ブッダの世界だけがあることになろう」というのが證眞の立場であった。

> 若し彼の經の如くあらば，一切の依正，皆已に成佛し，唯佛界有るのみ。[4)]

證眞は例外的な日本人で，仏教を正しく理解していた。植物が「成佛」するという日本オーソドクシーの基本定理については，まず文献根拠がないことを指摘した。

證眞が言うように，「草や木がブッダになる」と説く文献は，インドにも中国にもない。中国で天台宗の体系の構築の努力した湛然（711‒782）にしても，その著書『止観輔行伝弘決』や『金剛錍論』でも，“非情に佛性がある”と言っているにすぎず，“草や木がブッダになろうと決心し，そのための努力をする。そしてブッタになる”などとは言っていない。

> 一代の經説，一宗の教文，都て草木成佛の説無し。『〔止観〕輔行〔伝弘決〕』の十義，『金〔剛〕錍〔論〕』の一論，ただ非情に佛性有るの義を明かにし，草木の發〔心〕，修〔行〕，成佛を論ぜず。[5)]

さらに證眞は，理論的な面から日本オーソドクシーを検討し，論理的に成り立ちえないとして厳しく批判した。仏教の立場に立つ證眞は，植物が心を持つ存在にはなりえないと言う。

植物はやがて枯れてしまうから，心を持つ存在になるとすれば，枯れる前であるか後であるかである。枯れる前に，すなわち植物として存在している時に，突然変化して心を持つ存在になることはありえない。一方，自

ら動けない植物は何かの行動をとったことがないから，将来現象化すべきエネルギーの蓄積がない。したがって，死んだ後で心が移動して心を持つ存在に生まれ変わることはありえない。

> 又，諸の草木は竝に皆朽滅す。現在，變じて有情と成る可からず。亦，惑業無く，既に因縁を離る。滅後に有情の身を受く可からず。[6]

仏教の体系で，植物も含めて自然界に存在する物は，動物の心の深層部に蓄積されていたエネルギーが現象化したものである。心が変化したものとも言える植物は，どんな力が加わって，心を備えたものにさらに変化するのだろうか。このように，心を備えたものへの変化を説明することができないのであるから，植物がブッダになるとは言えない。

植物は動けないから自分で行動をとることがない。そうすると，心を持つ動物の行為の結果として，すなわち自分以外の存在が行った行為の結果として他のものに変化するということになろう。ある動物の行った行為の結果として，ある植物が変化するというのなら，多くの動物の行為の結果として，一つの植物が多くの物に変化することになろう。

> 又，諸の草木は是れ心の變じる所なり。更に何の力に由りて変じて有情と成るや。[7]

> 又，諸の草木は有情の業感なり。何の因縁に由りて轉じて有情と成るや。豈に他業に由りて更に他身有り，亦，是れ一人分れて多人と成るや。[8]

このように，心を備えた存在になりえない以上，植物はブッダになりえない。心を備えていないのなら，ブッタになる準備運動（修行）もできないではないか。

仮に植物に何かの心があるにしても，「細心」と呼ばれる特殊な心を植物に想定するにしても，本物の心を備えた人間や動物ですらブッダになるのは困難を極めるのに，どうして植物がブッダになれようか。

> 若し「非情，直ちに成佛す」と云はば，既に事心無ければ，云何に修行せむ。無心の得道するは，道理に應はず。若し「草木にも亦心有り」と云はば，則ち有情と同じ。何ぞ非情と云はむ。若し細心有りて方に成佛せば，有情の明心なほ成佛し難きを，非情の細心，何ぞ成佛を得む。若し細心有らば，亦是れ有情なり。若し理心有るが故に成佛せば，理性は蘊在にして，事成たる可からず。9)

ブッダに成る可能性が植物にあるにしても，きっかけがないとブッダになれない。人間はブッダの教えを聞いてブッダになろうと努力し始める。言語を解さない植物がブッダの教えを聞くことはない。したがって，ブッダになろうと努力し始めることもない。“ブッダになる可能性さえあれば，きっかけがなくてもブッダになると言うなら，すべての人間は何の努力をしなくても，自動的にブッダになる”ということになろう。

> 若し佛性有るが故に成佛するならば，理性有りと雖へども既に外縁無ければ，那ぞ忽ち成佛せむや。若し外縁無くして自ら成佛するならば，有情，何ぞ自然に成佛せざる。有情，法を聞きて性に従ひて修を起こす。草木，聞かずして，何に因りて方に〔修を〕起さむ。10)

仮に万物に潜在する「眞如」ゆえにブッダになれるとしても，外的条件が整わなければならない。そんなものがなくても「眞如」が自動的に機能するとするなら，心を持つ存在は，何の努力もせずとも，自動的にブッダになることになろう。また，自ら努力しなくても，ブッダの不思議な力のお陰でブッダになれるというなら，イッチャンティカもブッダになることになろう。

> 若し「眞如の内薫の故に成佛す」と云はば，眞如有りと雖へども，若し外縁無からば，薫成の義無し。若し眞如自らの内薫に任せば，有情何ぞ自然に成佛せざるや。既に自心無きを，何ぞ他力を受け

> む。若し自力無くとも但佛加に由りて若し諸佛の加持力に由るが故に方に成佛せば，既に自心無きを，何ぞ他力を受けむ。若し自力無くとも但佛加に由りて能く成佛せば，〔一〕闡提人等，應に自ら成佛すべし。[11]

ここで證眞が批判の対象とするのは，原理としての日本風「本覺」であり，それを情緒的に実現した日本風浄土信仰である。仏教の原則に照らしてこれを取り上げ，矛盾する点を正確に指摘している。

“一闡提〔迦〕”［iět-tʃ ‘ɪɛn-dei〔-kɪa〕］は，「〔この世の快楽を?〕望む者」を意味するサンスクリットの“イッチャンティカ”（icchantika）の漢字表記である。この語はインド正統派文献には見当たらないが，仏教文献では「最も憎むべき連中」「ブッダになる可能性が全くない連中」を指して用いられる。仏教信奉者は不殺生を旨とし，蟻の子を殺しても罪になるが，イッチャンティカなら殺しても罪にならない。證眞も読んだ曇無讖訳『大般涅槃經』には，次のように述べられている。

> 〔問ふ。〕「世尊よ。一闡提の輩，何の因縁を以て，善法有ること無しや」と。〔答ふ。〕「善男子よ。一闡提の輩，善根を斷ずるが故なり。衆生，悉く信等の五根有りて，一闡提の輩，永へに斷ずるが故なり。是の義を以ての故に，蟻の子を殺害せば猶殺罪を得るに，一闡提を殺すれど殺罪有ること無し」と。[12]

「自ら努力せずにブッダの不思議な力だけでブッダになるというなら，イッチャンティカでさえブッダになるはずだ」と證眞は言うが，全くその通りである。

證眞は日本オーソドクシーの無条件「成佛」を非仏教的と断じ，「化地部」や「外道」や「数論」に比している。

> 若し「非情の變じて有情と作り，〔今〕方に成佛す」と云はば，始起の有情は化地部に同じく，無因有果は外道説に同じく，生死に初

め有るは數論(すろん)の義に同じ。[13)]

“化地部”という語は，日本にも伝えられた『五分律』を教団法とした仏教教団を指し，その原語“マヒーシャーサカ”（mahīśāsaka）は，「大地を統治する者」という意味であり，創始者が元国王であったという伝説がある。その教義の詳細は不明であるが，ヴァスミトラ（vasumira/世友）に帰せられる『異部宗輪論』の怪しげな記述が日本では信用されていたので，「化地部」の教義が説明されている個所[14)]を證眞も見たと思われるが，どの項目を念頭に入れて「始起の有情」に言及しているのか分からない。

『異部宗輪論』でマヒーシャーサカを解説する部分に，「入胎を始めと爲して，命終を後と爲し，色根の大種は皆轉變有り。心と心所法も亦轉變有り」という個所がある。[15)] もしこれが證眞の言う「始起の有情」を説いているとすれば，「入胎を始めと爲して，命終を後と爲す」とは，「前世や来世はなく，受胎ですべてが始まり死ですべてが終わる」ということなのであろうか。「皆轉變有り」というのは，「受胎してから死ぬまで人間は同じであり，見た目に変化があるだけである」という意味なのであろうか。そうすると，マヒーシャーサカは転生を認めないのであろうか。もしそうであるとすると，これは仏教の一学派ではありえない。何とも不可解なことである。仏教の原理を認めない者が『五分律』という仏教教団法を設定するはずもないから，問題は『異部宗輪論』の記述の方にあると考えるべきであろう。

少なくとも，ここで證眞は日本オーソドクシーの非仏教性に言及して，マヒーシャーサカを引き合いに出しているのである。證眞にとって，マヒーシャーサカを「非仏教的な主張をする仏教学派」であった。『五分律』を守る仏教の一派について，證眞がこのように不可解な理解に達したのも，『異部宗輪論』の怪しげな記述に原因があったのかも知れない。「アンタラー・バヴァ７日持続説」の主張者としてインド文献『大毘婆沙論』で

重んじられているのも，ヴァスミトラ（vasumitra/世友）という名の人であるが，同じ人物が『異部宗輪論』のようないいかげんな文献の作者であるとはとうてい考えられない。

證眞も読んだに違いない『三論玄義』の冒頭で，吉藏（549-623）は「外道」の説を四つ上げているが，その一つが「無因有果」（原因はなく，結果だけがある）である。

> 問ふ。「云何なるを名づけて無因有果と爲すや」と。答ふ。「復た，有る外道，萬物を窮推して，由籍する所無きが故に，『因無し』と謂ふ。而して〔謂ふ。〕『現に諸法を覩て，當に果有るを知るべし。例へば，壯周の魍魎，影に問ふが如し。影は形に由りて有り。形は造化に因る。造化は則ち所由無し。本既に自有なり。卽ち末は他に因らず。是の故に無因にして果有り』と。」[16)]

“外道”の原語“ティールティカ”（tīrthika）は，「聖地巡礼者」を意味するサンスクリット名詞であるが，仏教文献では仏教以外の教えの信奉者を誹謗して用いられる。特にシャーキャ・ブッダの時代に活躍した６人を指して「六師外道」という。その１人がマッカリ・ゴーサーラ（makkhali gosāla）で，「この世に存在するものには原因がない。どのように努力しても，それが原因となって有利な結果をもたらすことはない。すべては人間の努力とは無関係なところですでに決定されている」と言って，決定論を主張した。この一派を「アージーヴィカ」（ājīvika）と言う。因果の法則を否定するのはインド正統派から見ても異端であるが，仏教の立場から見れば，ブッダになってこの世の苦しみから解放されようとする努力が否定されているわけであるから，とうてい容認できない説である。

證眞が指摘するように，「この世に存在するものは，すべて自動的にブッダになる」と信じる日本オーソドクシーの指導者たちは，アージーヴィカと同じように決定論者である。ただし，本物のアージーヴィカが悪い成

り行きに関心を寄せているのに対し，日本オーソドクシーでは都合のよい成り行きしか考えられていない。御都合主義を旨とする日本オーソドクシーは，バランスを欠いたアージーヴィカ説であり，本物のアージーヴィカ説以上に反仏教的である。

“數論”はインド正統派のサーンキャ学派（sāṃkhya）を指す。ここで證眞が「生死に初めある」と言うが，「生死」とは「輪廻」のことであるから，「輪廻が無限の過去から続いているのではなく，ある時点で突然始まる」ということであろう。日本オーソドクシーで言われているように，草や木がブッダになるなら，「意識のないものが，ある時点で突如変化して意識あるものとなり，そこから輪廻が始まる」ということになろう。こういう考えは，「無限の過去から切れ目なく意識が輪廻し続ける」とする仏教の立場と相容れない。サーンキャ学派によれば，世界の原要素は“プラクリティ”（prakṛti）と呼ばれ，これは心のないもの（acetana）である。この原要素から万物が展開する。精神も物質も意識のない原要素から展開したものである。證眞のいう「生死に初めある」というのは，この点に言及したのであろうか。

熱心に仏教の研究を続けた證眞は，1186年に学問の上で天台宗最高の地位「北嶺探題」に就き，1201年には権少僧都に任命されているので，その勉強ぶりは宗門で認められていたのであろうが，日本風「本覺」批判を継承する者が一人もいなかったところを見ると，真の理解者はいなかったようである。

證眞の仏教文献研究は，仏教の体系を理解することが日本人にも不可能ではないことの左証である。至るところにタマが跋扈する日本に生まれ育った者でも，多量にそして虚心に仏教文献を読みさえすれば，仏教の体系を理解することは不可能ではなかったのである。そして，最澄を始め外の人々は，それほど虚心に文献を読んだわけでもなければ，それほど高い知

性に恵まれていたわけではなかったのである。

証眞は正しく仏教を理解して「草木成佛」に異を唱えたわけであるから，日本オーソドクシー側としては，これを徹底的に弾圧して当然であった。しかしながら，日本はそういう国ではなかった。勝手に文献を読み間違えて打ち立てられた日本天台の伝統も，あれほど強引に独りよがりな言説を繰り返したにもかかわらず，むきになって反逆者を叩き潰そうとはしなかった。日本オーソドクシーはオーソドクシーの名に値するほどの強靭さに欠けていたのである。

研究者としての姿勢と熱意の点でも，生まれながらの知性の点でも，凡庸な仏教研究者が数え切れないほど並ぶ長い歴史の中で，証眞は飛び抜けて優れた人物であった。

注

1）『首楞嚴三昧經』，『大正新脩大藏經』15，p. 635: 身業隨口 口業隨意

2）小林信彦，「謡曲に見られる草や木のジャウブツ ―借用語に託された日本人の心情―」，『〔桃山学院大学〕人間科学』26，和泉，2003，pp. 25-32.

3）證眞，『止観私記』，『大日本佛教全書』37，p. 59，a. 16-18: 問 中陰經云 一佛成道觀見法界 草木國土悉皆成佛 身長丈六 光明遍照 其佛皆名妙覺如來

4）loc. cit.，a. 19-20: 若如彼經 一切依正 皆已成佛 唯有佛界

5）ibid.，p. 58，c. 14-16: 一代經説 一宗教文 都無草木成佛之説 輔行十義 金錍一論 只明非情有佛性義 不論草木發修成佛

6）loc. cit.，c. 18-20: 又諸草木竝皆朽滅 不可現在變成有情 亦無惑業 既離因縁 不可滅後受有情身

7）loc. cit.，c. 21-22: 又諸草木是心所變 更由何力變成有情

8）loc. cit.，c. 20-21: 又諸草木有情業感 由何因縁轉成有情 豈由他業更有他身 亦是一人分成多人

9）ibid.，p. 58，c. 26 ～ p. 59，a. 5: 若云非情直成佛者 既無事心 云何修行 無心得道不應道理 若云草木亦有心者 則同有情 何云非情 若有細心方成佛者

有情明心尚難成佛 非情細心何得成佛 若有細心亦是有情 若有理心故成佛者 理性蘊在 不可事成

10）ibid., p. 59, a. 5-7: 若有佛性故成佛者 雖有理性既無外縁 那忽成佛 若無外縁自成佛者 有情何不自然成佛 有情聞法從性起修 草木不聞 因何方起

11）ibid., p. 59, a. 12-16: 若云眞如内薫故成佛者 雖有眞如若無外縁無薫成義 若任眞如自内薫者 有有情何不自然成佛 若由諸佛加持力故方成佛者 既無自心 何受他力 若無自力 但由佛加能成佛者 闡提人等應自成佛

12）曇無讖譯,『大般涅槃經』,『大正新脩大藏經』12, p. 562, b. 3-7: 世尊 一闡提輩以何因縁無有善法 善男子 一闡提輩斷善根故 衆生悉有信等五根 而一闡提輩永斷故 以是義故 殺害蟻子猶得殺罪 殺一闡提無有殺罪

13）證眞, op. cit., p. 58, c. 16-18: 若云非情變作有情方成佛者 始起有情同化地部 無因有果同外道説 生死有初同數論義

14）『異部宗輪論』,『大正新脩大藏經』, 49, p. 16, c. 26 ～ p. 17, a. 22.

15）ibid., p. 17, a. 10-12: 入胎爲初命終爲後 色根大種皆有轉變 心心所法亦有轉變

16）吉藏,『三論玄義』, 上,『大正新脩大藏經』, 45, p. 1, b. 23-25: 問 云何名爲無因有果 答 復有外道窮推萬物 無所由籍 故謂無因 而現覩諸法 當知有果 例如壯周魍魎問影 影由形有 形因造化 造化則無所由 本既自有 即末不因他 是故無因而有果也